



「読み聞かせはいい」とわかっているけど、時間がない！

一忙しい保護者の声が聞こえてきそうです。子育て中は、ストレスもたまるし、自分の時間さえなかなかとれません。

それでも、子どもにとって「本がいつも身近にある」、そんな家庭環境をつくりましょう。購入した本だけでなく、図書館等を活用して色々な本に親しませてあげてください。

そして、少しの時間でもいいので、ぜひ絵本を読んであげてください。毎日 10 分間の読み聞かせが、親からの「無償の愛」の体験となり、思春期（反抗期）に影響を与えるとも言われています。

忙しいときこそ、読み聞かせで愛情を伝えてみてはいかがでしょうか。

学習塾は皆、『国語力を伸ばします』と宣伝したがる

今は亡き某大手学習塾の創業者が、よくこんなことをおっしゃっていました。

「学習塾は皆、『国語力を伸ばします』と宣伝したがる。

労がかかる割りに教育成果が出にくいからだ。

国語力とはまさに言語能力であり、これは胎児の時から培ってくるものだ。

言語能力が低い子ども、読書しない子どもに『なんとか国語力をつけてください』と連れてこられても、塾としては手の施しようがない。塾の力ではどうしようもないんだ。

でも親御さんからすると、高いお金を払っているのに！ とクレームのもとになってしまう。だから国語力を伸ばしますといった宣伝はしたくないんだよ」

私はこのお話を聞いた時、「やっぱり」と思いました。なぜなら、ちょうどその頃、小学生を教えていたのですが、言語能力の個人差を強く感じていたからです。

(中略)

本を読まないことのデメリットは、単に国語力が低くなり、結果、学力が低下することだけではありません。

言語能力が低いゆえに「自分の意見を人に正しく伝えられない」「人の話の本筋を正しく捉えることができない」「善悪の価値観が身につかない」「情緒が安定せずキレやすい」「社会人としてうまくいかない」という、人生における負のスパイラルに陥ってしまうことです。現在の日本では、言葉なしにここから抜け出すことは不可能に近いでしょう。

これまでたくさん子どもたちを教えてきたからこそ、わかったことがあります。

言語能力、そして読書力を育てるのは塾の先生、幼稚園、保育園、学校の先生の役割ではないことです。母国語教育は、すでに子宮内の赤ちゃんから始まっています。生まれてからは、ひたすら絵本を読み聞かせる。本好きにするには、一朝一夕にはいかないのです。

だからと言って、諦めることでもありません。

気づいたその日から、本と一緒に生活を始めればよいのです。

*『心と頭がすくすく育つ読み聞かせ～やっていいこと・やってはいけないこと～』（立石美津子・著/株式会社あさ出版）より

気づいたその日から、本と一緒に生活を始めよう